

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	笠 井 昭 吾
論文審査担当者 主 査 形成外科学 貴 志 和 生 歯科・口腔外科学 中 川 種 昭 耳鼻咽喉科学 小 川 郁 解剖学 久保田 義 顕 学力確認担当者：岡野 栄之 審査委員長：中川 種昭 試問日：平成30年 3月 8日				
(論文審査の要旨)				
論文題名：An anatomical study on the availability of contralateral recipient vessels in hemi-mandibular reconstruction with vascularised free fibula transfer (遊離腓骨皮弁移植による下顎半側再建における対側レシピエント血管の有効性に関する解剖学的研究)				
<p>本研究では、下顎半側を血管柄付き腓骨で再建する際に、同側の血管が吻合のレシピエントとして使用できない状況を想定し、対側のどの血管が吻合に有用であるか、という点について、未固定屍体20体を用いた模擬手術による検討を行った。その結果、上甲状腺動脈と外頸静脈は、レシピエント血管として十分使用可能であるが、頸横動脈と内頸静脈は、必ずしも使用できるものではないことが示唆された。</p> <p>審査ではまず、レシピエント血管の選択、特に、下顎から距離のある対側の頸横動脈をあえて採用した理由について質問がなされた。これに対して、今回選択した上甲状腺動脈、頸横動脈、内頸静脈、外頸静脈は、頸部郭清の際に同一術野で剖出されるため、吻合血管として使用頻度が高いことが理由であり、血管は内径が1mm保たれるところで切離を行い評価したが、一方で、顔面動脈や舌動脈など、皮弁の血管茎に近く、温存されることの多い血管も、レシピエント血管として検討すべきであった、と回答された。</p> <p>次に、血管吻合の可否を、ドナー、レシピエント血管を重ね合わせられる、または足りない長さで評価したが、その値に個体差が目立つため、その要因について質問された。今回検討材料となった血管はいずれも解剖学的変位が大きいものではなく、模擬手術中の印象からは、下顎や首、下腿の長さなどの、体型の個体差によるところが大きいものと考えられたが、実際に体型について詳細なデータを採取していないため、今後の検討課題である、と回答された。</p> <p>また、吻合血管の選択については、造影CTやMRIなどの画像検査で血管の評価を行うことで、事前に計画を立てれば十分だと思われるが、本研究の結果をどのように実臨床に活かすのか、という質問については、実際に画像検査で評価を行った上で、同側の血管が使用できないと予想されたときには、対側の上甲状腺動脈と外頸静脈を使用する方法や、静脈移植などの追加処置を考慮する、という判断の拠り所としての意義があると回答された。また、本研究は、元来経験則で行われていた手技を、数値化し、より適応を具体化したものであるという解釈がなされた。</p> <p>最後に、今回の結果を踏まえて、今後の研究の展望について質問された。静脈移植などの追加処置が可能な遊離皮弁に比べ、有茎皮弁での再建は、術中の修正が難しい上に、遊離皮弁の失敗後などのより厳しい状況で行われることが多い。欠損の箇所と皮弁の選択については、過去の臨床報告の蓄積から、おおむね標準化がされているものの、それぞれの限界について、より具体的な数値を示してゆくことが出来れば、臨床的な意義が大きい、と回答された。</p> <p>以上、本研究は検討すべき課題を残しているものの、未固定屍体を用いた模擬手術により、まれな条件における治療のシミュレーション技法の可能性を示した点で、有意義な研究であると評価された。</p>				